元笈
上下

竹取物語 8

宮内省圖書寮

○ふけうるまの物語

いまはむかしふけとりといふものありけり
そのりやうはいとまづしくてふけをとりてくらしけり
事よりほかのひとりぐらしをばさぶらはのこやにこと
なんいひけるを竹の中よりとりたる竹をんな
一ともありけるまあやしがりてよりてみるに
竹の中ひとりまるまるとそれをとりたんこにとりて
なほ人にはをうつくしうてやしなひおきたれ云やう
まれ物ことなるあとまだんふけの中よりおとをする
まそたりぬるよりなほ物をもとめ人なりとて
をようちにてをとをもてそこぬめりの女をもてあつ

けて座しきたりうつくしき事うきよ
いとおもしろきはなこゝに入て屋をふく竹とり
乃おきなが竹と呼はじまるとなんけてのちはか
ぐやひめとなづけてこゝにおろしたる竹をみ
たるに事かさなりぬれかくてあされやうく
ゆくようになりゆくはちこやしるふほどもなく
くとおほきなりまさること三月ばかりはなる
程よりそだちまさる人よりはなはだしかりけり
とかくしてかこあげさせきらやうの用意もい
出すいとまなきかりたちまち程なくはちこの
かくちのけそうる屋の内をも

ちりうつくしきところをくひろうんちりあされたる
ちりうくをあつめてきあけをはしとをれしたる
きるもやこぬもたくしき事もかくなく
さんさりおされをけとなるやひきくあるを
はらへよりはしるいとおほきなるぬきいれを
みひろといんなのあきをとひてはけさしあ
きなる所のかくやひめと付るはは程三百う
ちあけ所をよろひ乃あそひをそしけるお
とこをうけきりいたしひほとへくいとこ
くあそこ世界のそこおこあてなるをいやしき
もいうてこのくやひめをえてしるなんと

ゐれとをもとにきてめてくまふうのあはれの
かさるをもかれとをもをる人さまとやをく
ゐるまーきのはるはなをれいるものをやミ
の衆をもこてかーこうりのそれりのまゐんまと
ひあるりさるをときさりるんまひとといひろう
人の物ともせぬ所るまひありけをもるふの
をるーあるへくをもゐんくをの人たま物をに
いをんをそいひかるれをもあをくもせたある
まをとをれぬ衆ををあーー目をくをと人お
かうりけうをうのなるひとはーまるをありき
をまーなりけるまをそあををりるをりを中

まるをいひけるをいろこのをとをいを海へ人又
人異ひやむとをれくまりをりをりをの
名一人をりーけくまれ海ま一人をくをもの
海子一人をを大ゐあ人乃こむーー大納言一人
をを大ゐのをゆをを中納言一人はいをのゐんのをろ
をりは人ををりをろ世中まお海の数人をを
ををこをもかををもをまーとをきてをゐんまかりをを
海人ををりをりをれくかをや元先をゐまりう
てをもくをを異ひけくかのゐまりもてくすを
ありををれたかひまを人くをあーすをとを記て
海れをもををるまもせををひうをるををうの

うりはまたかひちゝと思へとも春月はかはいの
ありあはまこと月乃てりそくをさゝ
をきゝりは人こあるとゝ記を行とりとよひ
てむをえんと我よりを嫁おうんをとりの
あへこなのうをきぬるなれハ必にもをうえ
ひとをんいひく月日ををかれてハ人こ
あるようりく物を思ひいのりをくりんを立
おりひやもへくをあゝひさりたたねる男あハ
世ゝもやいと思ひくををうけるわか
うちよんをゝをんくありくあれをんつけてお
きれかくやひあよいつやうををはとけてんけの

人とやかゝあるをを物おはをれまてやゝをひ
ををゝをゝをろうをゝひおをれのゝさん事
きゝあひてんやといへをかくやひあ何事をう
のゝをりんゝをゝをれゝをむをんけの物をて
物をんをををゝすおやとこをおひをれと
りゝおをれうをゝをのゝをのゝをれとりゝお
をか年七十まあをりぬをゝをもあをすをもを
らをハ世人を男ハ女をあゝ事をを女ハ男
りあゝをゝ縁をををををんを門をゝくをもを
物をりゝをゝ物をを事をくをはおをををんかく
やひめ乃いをくをなんをゝををんゝ物をん

とのへさしあたんけの人とりつかさ女の多くなら
ぶるもりあるきなれあるんかきりをかくてもい
ませりこの人くの幸月と為てかしのこい
面一つのくまをもと思ひ定めてひとりく
よあひあへるといへとかるやひめいとく結も
あるぬかくちとあるきいをもてあるんけき
をはのちくやしきまもるをきとはりへ
もうりるをせれかこと人なりとをるさん
ちしたるてあひくとをんかりをとはよ
おるれいとく思ひのこくもの結ふるもも
くいのやりるをるくあるさあるん人りら

ありんとおほをかこうんをろうをぬ人
人よこそあれくやひめのいとかをもの
ふうきをうんといとをんいけひめのりなり
人乃世ちひとかんなりかてう中をを
とり面をりををくむ人乃中よ捨てきも
のをんせあへんよは世さ面をりとて
けうまんとそのおもをん人こより
給へといふををりとうきつ日くるか
と出いのあつまりぬ人こあるひををえをき
或をををうひ或ハをやうをあるひいう
そををあつきをあつをををにおこ

いとくかしこけれどこころよき
風をくるまの行事ありてくかしこま
御とゝ御されの命くゝあををゝをゝぬとか
くのゝ人毛生ゝもゝ思ひたゝあてたかゝま
たれとゝもとゝりなるといつきもをとゝまさ
里おとゝまさゝよゝたひさゝの程をゝ山色し
たくうまつゝん事色をゝれよゝんたゝもへき
といふ色ゝこれ紙事ゝ也人のゝゝこゝもあるま
といふゝ人乃人ゝもゝ紙事ゝりといへおゝれ
いりていふかくやひめ石たく里の佛よゝん佛
の石乃はゝゝといふゝ物ありゝれをゝてのゝと

いふくゝもゝらの石よゝ石の海よりゝらいと
云山あるなりゝれよゝゝろゝをねゝこゝよ
をくたゝ白ゝむをゝみゝてゝゝゝ歌まあり
そ是一えゝおりてたまりゝんといふ今ひゝり
よはゝあゝよゝ火ねゝこのゝたゝあをたへ
大伴の大納云ゝ人のくひよゝ名ひ所
むありそれをゝてゝゝへいそのゝゝ中納云
よはたゝゝめ乃ゝゝこやを中貝ゝて所へ
とゝふあゝれかゝ紀事よゝをあ毛ひゝよ
ゝゝのよもあゝすかくゝ紀ゝをゝいゝよ
ゝんといふかくやひめをゝりかゝゝんといへ

そのあとをとゝめあまこうくもあまこ一ゞさんをとく
おてかくあんやうゆあるやうよあんのへといへてば
子ゝらよをまねきくてをいゝうよあゝりちう
ふるありきそとやハのゝまいぬと云てうん
してこれゝうぬをゝ女人てハ世よあるまう
きのちのゝくれてんちくよをあもてハ
ぬ物ゝと思ひめくゝくいゝつゝりのゆゑ
ゝうのちゝくゝを人まて天ちくよ二ゆとゝ
ちゝを百ゑ万里のわといさりとをいりてゝの
ゑへきとなりひてかくなひめのもとまハゝふ
なん天ちくへ石のゝちゝりよ海ゝ海ときゝを

てゝ三年ゝゝり大和乃国とゝ紙ちのこゝりよある
山もよひんをゝのまへを海ちちのひさゝろよ
をゝんつさゝ海ととゝりてゝ一きれ海ゝへて
ゆくゝを花のえゝをよけてかくゝやひめ乃ゝり
をてゝくゝかをけきてかくゝやひめあゝゝりて
れをゝちの中よゝ又ありひろまてゝんまてゝ
うゝ山乃みちよ心をけゝをけてゝをかいゝのゝち
の海をゝまけかくゝやひ光ゝりゝやをとゝろに
ゝ海をゝりゝひゝりゝふかゝ
をくけゝ乃ひゝるをとゝにもやとをます
ゝゝてゝの山ゝをそをまをもめゝん

とてもしゝ出をさらを門より拾てゝ方のやうにて
ゝ山よりあへくひらりのうとぶこと
くらとすてゝもそのまゝうか
とゝうんくへさりかくやひそんやしもせけるりめ
ゝて毋をきゝへさりのけをいひかゝらひて
ゆりぬはくらをすてゝくへいひけかよわそおも
るきうゆといたらをとをたるとをたるをいけかくゝも
ちりのゆよをひゝをかりるへ人まておゝあけよい
はくゝの國よゆあをゝりまゝうんをていゝ海
やてくやむめの部へなをあをとりよあん
まゝ海といをせくくゝりあつよたるうまつる

為きへくんか雑俗まそ出をとり出けるゝ出ゝみい
とおのひてとの為ゝ出せて人もあまるあそおい
しまたちゝうたゝうまつるゝ紙りして御めひ
出をくまゝうへくゝうんをまわをくまて為りぬおそて
まゝぬとゝ八はひんてゝ為ひゝ三日ゝりまゝてこ
き為ぬゝひてゝとんか為ゝりゝれをを附一ゝ
のたゝうゝゝあり為ゝうちゝくゝ六人をめゝ為て
ゝゝ為をくへよりくまゝき家を為ゝりてゝうま
と紙三為をを為てたゝをへ為ひつゝ出よし
同形をゝをりあひてをゝせ為ひゝ為紙十六そ
とか九よくゝと紙あけてあのえゝ紙為ゝり為

かくやひめのあふ物よをすてゝはこくうまれいで
と申しをきたりけるとうくるかぐやひめそうよりて
出ぬ事をのわて物りきよそうと慶よはけやわ
てゝとゝいふことをきるしかりゝ海物して居あう
むろよりおくくとあらわれえることはもひのよ
へて物をはひくれて来るいつゝ少そんくくも
ちの法をもうくんくゝ乃花物そのかり法つり
とのくもりそりあれをかくなひあきて我ハ
はゝ法をりまけめへーとひはれておもひ
そりかゝ歌程よ門をたるまてくくもちの法を
おりーふりとはく藤の御姿あるうおりーふりと

いくくあひを海はよの法りく命を捨て物を
のえを物てこそ物とそかくるやひめよりを世をり
絶と申をしおるこれ物ていをそりはなをの物
よりあんそはけるよりけり
いくはくよあいかーつをを世のえを
ををを養をも乃をて物をりまー
へてはくくはゝよ行衣のををれりを
乃えをと一はれ面をまやをまれをておりーま
せりはを物てをくくをさ藤の法あるうを
う御姿へをより法はをーておりーまー中り

たゝやはらかなるあひだにうまれ給へといとり
拙もいとをしつゝ法えをはきていとうしくるけり
しけるを思ひしらはやとて今さへ侍らんといへうら
をとゝろまゝにえんまひのやうなる物をきれ理
ま思ふはかりはなるぬおもひ乃殺をわはかりはかりいそ
うゐるひゝさん人拙もよ紀人よおもはるをとい
ひわらりかく為ひをえの云拙菓の乃あるをを
紀ゝ所をいるひゝ　さゝとのいとおゝさはを
ゝ紀拙我ゝをあさ海ゝををて為ゝをを
をゝ思ひおさをは新為のゝちをゝひををを
おゝ紀はゝをゝ拙ゝのゝをはよゝはまいはひ

くんあ国ゝくゝはゝ侍ゝくをめてゝ紀物をゝをを
ゝ侍をこゝくんてのゝを海ゝくさおをゝゝは二月
の十日ゝゝを雑波ゝゝり毒にのゝて海中ゝお
て為ゝんあもをゝをを見をゝゝゝと思ゝるゝを
く世中ゝいさ何のゝてせんと思ひゝゝをたく
ひゝゝ き風ゝ海ゝをゝくあゝゝを命ををいかく
を毒せん生てあゝん限かくありきてやゝらゝと
ゝらんゝゝあやゝと海ゝおを紀をゝをひあゝき
て我國の国をゝるゝくあゝきゝゝゝゝゝあゝ
海あをつゝゝをこのゝゝをを入めくゝゝ海ゝ
風ゝ侍けくをゝめ国ゝ吹ゝをゝゝて鬼乃やゝ

なるおおきてこわさんとしきゐゐまいこてがさ
りまるもきてうとまれきんうゐまはは
うてはさく茅社稲をくひのこゐまいん
かくれくもくはけきの所てくひかく
らんとしきゐ所いうんのいをえて命をつく
藤のそこにすけ給ふ色さ人もきゐまゐ
の病をてりあそもそこに世利ようか
てうこたくもしてあ百日とこゐ川のこく計
ようこの中ようこに山んあ世内をうんせ
めてんろうこのうこよりそこゐ山いこおわさ
まてあうこも山のさ海こゐくうまれつ見やわ

もとひろ山なくひとく思ひて出すにおそろ
あをそこて山のあくりをはしめくくして二三
日計見あわくよ天人のまをなひもくゐ女山の
中ようおこて毛ろまのろれまるを拾てあくく
こありく見をんて毎ようおりくこの山乃名を
何とりとこよ女あくんこ云これいかくらいの
山ありとここよ見をせようまてこを沼の
ば女くこのまを穴雅ととよ我名ちくかん
るまこ云てふと山乃中ようゐ女その山をんるま
ちくよ上陸なき稼あこを山のそいひくをめく
きこ世中よなき義の来たそろ金ちろ

ゆきもてゆけば水山より流れ出でたる川あり
乃稽流せりまきあり
まきをはじめて折るに
るもしらぬ
花を折りてまうでぬ
世よりとりあつめたる
てうそくよりとなくて船よりのりてあひ風
吹て宮宮よりもんまうできあり大勢ありや
難波よりきのふ難波よりきのふ
ぬれしら夜さよふるまで
ぬるとのもへも
ぬれぬれてあるけきてよめる

なれ行の世とりけとり野山をも
さやさわりをしらぬとのこと
色をぬるよりてまく雑の日しろ思ひまをかつる
ゆはけふなんあらぬあることのくるまひて
ひくとりとくふくはけ色いとひとさの
よなよりをもとまもとまあへ
もの給ひかくかぐや姫は男は六人ありて遣り
おなじ一人の男ありてさりけんをとりみてくもく
ひしりさりきくあやあのうちまろりさくむ
の木をぬりぬりぬ事お国をうち
て千金日よりをぬりてうちまくかうまを

よろくいまさらに物のいとなみ見を行てうちきけこよ
ばせんと云さくさくけうとう行末のおきれしさく
ものらうとうもハ仏事をとかくつきあり法ハ
わきまうをあるべき事をきいてきもきえぬ給ひ
見とかくなひあきてはなきとこれと云て
これハ又よりけるやうの君千日いやしき
今くしとをもろともに同ものかくまぬ給ひく
かりこそ思のえうをなく給ひて法ハを
たまはりむとは仏のひさ光をはしはあんさるに
法つうひをおもしまたへきかくなひあのえう
しを給へきけりとりとて思てはなよりを給ひ

むとりて給へきなりとりなきてかくやあ
くはくまくまは思ひとこれはるの地まうひはうへ
ておきれをまひとりて云ほう深なりらいの水
かとこうおりひはきかをあさ海しきうとと
まてあけきこはやはしいへとおきれこと
人はうにはてをはと空はまはうへさんこ
とりとやもしとうありきをりかくや見えの
んゆきまてくありはるうれはし

陸ことかをはそんつまこことれをを
うさまこはあれえうをありける
空のひくあれえうをはつ竹をのおきれはハ

うりかうこひけるに
をなじほどのふねもたゝぬほどにうさまで居
給へつるはいかゞ思ひ給へつるはいとへつる世
せーたくんをはかくやうめいとひとへてうきて
き人ともありといひてろくいとおりくらせ
給ふたくこらいうーくよろこひて思ひけるほ
ゝもあるれと云て物ゝをまてくらもちのは
子ちのおろかゝを調させあふろをえくひも
なく皆とり持させ給ひてけまハりけうせよ
里ゆきてしばらく一ぢ
ー女城始をありぬのくるあるさ天下乃人の

おもひけんまれとうーきうゆとのめひてくこ一ぢ
あるさ山へいり給ぬ文ばくさばうゝ姫人く
給ふをまちくもめなれた給死よりやー
給ひくん給ひけるけなぬ給ふの所ゆより
ゝ給ちんとて年給ハさりけるを見を
なんおもうの所とは云てめけるを天下あ人乃
こむーくゆさまりゆゝよ家ろさ人まて
おりー世所こを年こさりけ我まろー船のま
うけいと云人のりとくよ文を書て火鉢ちこの
もとりくまる拾ひてをこせよとて作ゝまろ
人の中よりたーゝ明ろをえくひて小船のさ

まりと云人へとをけて此の泥をそいるりはうう
よりなるまうけいは今金をとらすわうけいあこと
ひろけて九くと起事むなしく大福すこのうハころも
は國よりなき物也をとるはきけたいまこゝ物
あり世よりまこ物なるうたはゆよりてきたくきる
まゝんとかゝ紀わさなり也然たゝ天ちくよ
おちうまゝて海りうはゆ者乃あさりよとゝ
らひもとあんよあさ物あゝも使はうゝて金を
も起しなるんといへつまこの此もろうふひさを
つ小船のうさまりまうてこくまるのりると云
事をゆてあゆこと乃うをなるをもちてもう起

せんうゝ（さ世紀ゝ此よ馬よのりてけくうり只
七日よまうて来るうゝ文を乃なるよ云大福ゝこのゝ
ゝ衣からうして人を出てもとそをなる今の世
よを昔の世ををひりもきたゝあくなれをの分
つまうりむうかうこゝきゝ天ちうを乃ゝ里は國よ
まて海つまて行りけ海面の山ちよありとき乃及
ておほやけよりてかうゝてゝいゝて事乃
あゝひの金をく形ゝ也こくゝ使よゝゝハ
まうけいゝ物くらへくゝひうり今こゝ〇あ十面
行ゝ乃ゝ一毋乃海ゝ海ゝんよ使てゝひをくれゝ
かゝよゝ海をを物をゝ物をゝ物衣のをちゝ乃ゝ人と

いろこの事をとんでいのおほきいまうのかよこそ
あるべきうれしくしておもしろかりしとそもの
あつのうたにひろひく蛙おうこ法ふけうと
きぬ入るなとこの法をはくさくのうぶつ
きあるをといろえてはくきりうとさぬをとんまは
こんじやうの文あるけのをとをはこうのの光
しにくやきりたうとかんてうぶつき事
弁をきあるし大よあけぬ事まりもけうら
なる事法ふしうかくやひ光このりから法
ようこそあけをこの海ひくあかりことて
ここに入ひてもあるえにけて法方乃

けさうはといくしてありてとまりをんものの
うとあはしてうこんくこんくもらそいまう
そりうのうをる
かさりなる紀里ひよあけぬうとこをを
たりとうこそくこそそきめ
といるをとあれ門よりそいりくそり竹をを
きそとりくかくあひ光をかくあ乃
りたん衣をんて云うあるこれうまれて
袖のかくあんせうこれ竹をあるくいくく
ともあをかくもあをこをたやうし入なんん世帯
よんてしぬうとをぬのうあるをこ光をとと思ひ竹

ひと人ないらくまひさせ給ひなんとて
そらくるひをへてそまろかくまひをへてひ
度いかなるひわうんと女のなかも思ひそうは此
おさるいかくやひめはあるとうけかけ
まさるに人よあらせんと思ひそうれとせらる
いるといつするまさるえさひぬはは史かくやひめ
おされるまさひつとも衣を火ようやくを度はを
こそまこしるうめと思ひて人のいつ年まま
けめ世にるき抱なれをうまをまをうかう
ひかく思りんとの給ふれ光をやこそ必ずんと
云たれそれさもいをうとをて大臣よかく

なんどとりつ大臣こふへて云ひうをもさを給
こうまをなりけるをからしてををめさう
ねるるる迎なかうふうひあうんさはやとを
をやあまをてんのへといをを火の年よおうへ
て屋うせ行つよめうくくと屋けぬされいこそ
こと抱のうををりうをりといつ大臣光をんのひ
てう用き年れをの名をまて屋あへ屋かくやひめ
あしうまをてとよをくこひてをりうれをうんあひ
けるを言乃ぬをてをこを入をくぬを

乃ぬなくをゆとをりせはういをろを
思ひのはうよを光をくかんまを

とあつけるは世間のいとまなくて世乃人こ
あへ乃大臣大納言乃ものも夜とまていまして
かくなげひめよ位落ようとかきらすやいまは
とふあるかの云かたい大よくくやまるもし
うはめうくとあけわしうもかくやひめもひ給
ハとといひけるを見てそとけるさものと
もあへなとと云けるを大伴のミ超きの大納言ハ
我家よりあるとあるかへとあれめてのゝ海とくゝ
はのくひよりのひろあるおあるうきを
あてなりうもん人よはねうとんるゆとうれるん
とのうまふをのこ共位の事を見てやさく

位の事をいとをたうとう但あのおとゝやを
くらうこうをいもんやうれのくひのあいく
ごうんとやあつり大納云のあ大のひろひを
いもんものゝ命とすもうこもをのう者共あはせ
事をこうあてんとこそ思へけるは国よなま
てんらをまるこのあるもあるすはゆの海ゆ
よりうきとりの国乃拾遺いうよ思ひてう汝
ゆかうこを拾とゆ色きをのこたゆ拾ひうん
いうくハせんかゝ記拾物を位ゆよをうひても
とあるまかうんとゆよ大納云乃ゆうひてゆん
ちうう者の位とんとをかうつ者乃位事をい

いかく是をうむく面さとの給ふ所乃くひのむ
とわるとそおしふて給ふ此人この乃れかてく
ひものよ慶乃間のけぬまさせるとある張弓
あ〇くれうと況ば人こともゆうまていもねと
も我ハをもうんしまとりえてハあるよゆりくる
との給ふ世るりをの〇く作ゆ乃てあるぬ弱の首
乃ふまを於すハゆりく肌との給へもいつちを
くあ〇乃むさたらんかゝいるんをかく歌を
きるゆをとあゆ事とそ志りあ〇里給ふ世るゆ
拾をのくまけつく文或ハ或ハをのうゆるりあ里
最或ハをのうゆるりき耶へいぬ歌者と

ゆ給ふ此くつきる紀るゆをとゆ世給ふ事とこ
とゆるぬ拾ゆ人大病をそ〇まあひるりかくや
ひ給ふ百ん与はきいやうよ世ん与くくとのさ
まひてう流りきを世をたくり給ひてうゆを
ゆりま紀給して世ひて給ひて百ん与はいと
をうめくを多ゆ拾ゆ世をくうちくゆ乃ふくひよ
ゆいゆ百くもあるぬあやをゆ拾よをゆて
ゆことをゆるまをとゆめをもゆかくやひめを
かなるひ給のをんまうきてひとゆ流くくし
給ひ給ゆくく人ハよゆひるまちたまゆり
年こゆるまをてをとゆ世を給をゆりていと

たのひそ　さく　こうり二人めつ　きと　てやつま
しまひさく　非波の　亀　よおりまて　とひ　給よ
まい大使の大納言　人や　母子　のりて　列
こうりてそうくひのたまと　給ふ　とや　ものこと　は
もるに　母人　おろ　くいもく　あやし　きつ　ゆる　と
まうひさくさうわ　さす　舟　をなす　とおろ　海よ
をちなき　事　もる　母人　もわれ　ゆ　かえ　まて
かくいを　おは　てわう　弓　力　を　列　あ　ら　ん　よ
といこうして　くひめ　あ　とりて　てん　を　そく　を
ふやけ　ちう　をま　て　との　給ひて　母よ　富て　海
こにあり　き　給ふ　と　を　くく　ひく　て　の　方の

海よ　お　記　出　給　ぬ　い　かし　こ　ん　こ　や　き　見　次　世　男
く　か　わ　て　母　を　と　記　て　あ　り　く　い　ま　の　こ　た
ち　こ　ん　母　我　海　中　に　ま　り　入　め　へ　く　ま　き　て
て　波　を　新　よ　う　ち　ひ　つ　く　ま　き　へ　神　い　為　か　ら　極
こ　よ　記　こ　め　き　か　く　記　れ　よ　大　納　云　を　ま　ひ　て　ま　こ　う
か　る　ま　ひ　き　め　見　を　い　う　る　ん　と　を　ろ　そ　と　の　給
人　か　ら　み　ち　る　ん　て　ち　て　母　よ　富　て　元　あ　り　く　よ
ま　き　か　海　わ　記　て　き　め　を　れ　を　こ　母　う　こ　の　そ　こ　よ
い　う　を　は　神　お　ち　か　ら　わ　め　へ　し　り　き　い　を　ひ　り
神　の　こ　す　け　わ　こ　う　を　海　よ　を　ま　れ　お　こ　ら　め　へ　し
こ　て　を　こ　の　み　と　に　た　こ　ま　ち　ら　て　す　く　給

ある志ま殿さへうめるゝ風と掾元あく大納言
元とゆをての給ひく〻ふ〇よ事てハかちとり志
ゝ事をとそうるきゝ志とゝめなとくゝりあり
けるゝゝそとあそとて成つきての給ふうち元
ゝ志へてゝ神ゝ〇ま伝わさをうけたうまり
屋ん風ゝきぬとけしけ毛共神さへいゝと給よ
おらかゝ海やうるい詩をこゝろさんともとめ給
へくあゝめ也くやてもまうけふうすゝさや神
よ初月を給へと云能事ゝるわとてかち元の伝神
きこゝめ也志殿ゝく紀とさゝくゝふをこゝろさん
と思ひゝり今よりのちゝも一もちとゝふうこ

かゝ毛ゝとゝとゝ成たゝらく立ゝあくゝく
ゝまひ給ゝ事ゝ〇殿神ゝ〇けゝやゝあらんや
うゝく神ゝりやゝこゝぬかひゝりて風ゝ志給たゝくゝ
桃元のゝゝく毛ハ詩のゝゝまゝまこゝそゝけゝ志
ゝく風ハよゝ紀ゝ社風也あゝき方の風よハあゝ
を給ゝゝに越てゝくゝゝりといへ共大納言ハ毛を
ゝ文入給ゝ志三日ゝゝきて姫ゝ志ゝ給ゝゝ
くゝまをゝれゝけゝりまゝ乃あゝゝのゝくゝまゝりけを
文納ゝ志ゝあゝのゝ海よゝゝきよゝゝれゝゝゝやゝあ
給んとゝおゝりひゝくゝいゝゝきゝ給ゝゝ身よゝあゝ
ゝのゝこゝゝと國ゝつけゝふれ給國の給ゝうゝさゝゝで

らうて姉よりも幼おきあり給たて給うこま
姉一行人里松原よりはひとりもさきおろ〳〵なり
こも所よそ国海よりあくさりりと思ひてからう
してあさはのう行人ゐとんまこハ風ひとおりき
人まくくとういとこれちるさうれ毎の同まハ
すも〳〵と二ほけさう程也もとゐんまりてそ国の
はくほとかくさこと海まよ行給てさてつく
雇せのひてよやうくまおれくあるよ入のひ
めうをいそうきてくんほうくをのこた
まりてや程よりの前乃むをえうくさわ〳〵ーう
も南後つと幼まあ〳〵さわ〳〵ゐれ元かくりるを

もう給へまこはゐんかしそうあしとてとまつる
ゐや大納言おれ居ての海りくなんちくよ
くもてこをゆぬ給ハなゐ乃のふいまこそあ
ゐまけきうれうゐをとうんとてうこられ人このの
ういせ〳〵きんとうりゐくうりをとくへさ
らまうくんこへうもれ〳〵我ものいきれちまお
ーくうくへをゆ嫁よくりかくやひめてゐあか
盗人乃面りく人をまろさんとほうるりうれ
のあくりまよ今ゐと現〳〵男たもああり
きそうて家ゐおのくりけふ拘たいゐりの
ゐとうぬ者たよまひつ色を給てくれ給

ひしをとこの上ハかるくまこのくまこひ[illegible]い
とをかうせ行くまこ屋いとひかるこのすま
るくひりていよくうり世事の人乃云けるハ人体
の大納言ハそうのくひ乃むこをておりこまこ
いれ行くあるこ清まをこなるもくけやうか
ゑ乃ゑ様そうへくいまたるとこひくまいあな
こんうこのひくこ行よりも世をあるぬ事をは
なれそこんうこくこのひとくめけ新

ふけとり物語上終

ふけとり物語下

中納云いうのうんのまゑこまこ乃ゑ行くこ
屋くちなのことを乃もとに行くこめけをくひ
そこいこ行けよとの行をを取まそなあの用より
あんとかあるこんての行をやうにくくゑの
まこ行こやこ見をとくんまこありとのくまを
をけことをこくこんくこ行くこめ様あまるこ
ろしてんるくこまをはこにな様ものうりそく
ーこうむけあんりそこいくこすんんとか
人くをんんまこくう勢ぬとかーを人乃かーを屋う
おかいこ行こ乃いひくを屋つむのをはくの

あれこそに侍るべくて、絶えぬるをとくひ侍らうれよ
まゐんあるべくんをのことをとひくるあわてあるべく侍
ゆひあけくうくいせんようこそ侍るべく絶
ゑうあはせるべくむやをあはこそとるべくめさまつめやと
中納言よりつこひ行ひておるべくおる事まと
ゐこうれをいかもえをいさるべくさりけう有るべく
りとのひてまゐるをものことを女人いりり
侍らうりてあるべくひよなけをへらまるべく屋よ
里殺ひまなく侍らせくこやをものひとわるべく侍
うやをむるとせあるべく侍をくるめをひとれ何まるべく
乃殿り居るよおるべくをにものわるこんかるべく

よるのやるべく城やうれい史ものひているべくをゐるべく
とおるべくまるべくふるよはるべくさの史人くるべく九
ごやるべくおるべくれやうこやを見やるべくんとおるべくめ
さはなるべくうやるべくさんとて御おるべくまるべくれを
中納言殿るべくひとあるべくをせくむるべくひ行るべくるべく侍
まるべくやうあのるべくるべくめこやを見いあ
をなるべくうるべくてるべくるべく殺のるべくなりさるべくいえるべくるべくせ
侍るべくあれるべくなひよおるべくろくるべくしるべく女人上るべくて
侍れるべくあきるべくてるべくりまるべくるべくこをる迎せるべく勢侍るべくよ
為るべくやうるべくさひのるべくるべくひをこ須るべくるべくく人るべくんるべくるべくり
うるべくさるべくてまめなるべくんく人一人をあるべくたにのせるべくと人

てはなとうまへくくるのみうまんるりはなを
はりあけさせてみとこやもとうひとうとう粉給ひ
なんよかるへきとや中納言のまゝやうい
とよ紀事ありとてあるひとこわ人なる
ゆりまうてきぬ中納言くくはたよのまゝも
くはたくくめきいりなる時ようる張りむと志
まて人をはあく為さとのまゝくろ丸や板
はたくくめようまんとをる時も尾をはつけて
七度めりてあんうんおとひめる梅七度めく
らんありひきあけてその板りこやすうひきこ
羅せあへとや中納言よりこひ給て百の人

まを走くせ行りくみそうに浦うさかのまして
をのこたの中よ海つまてるをひるにかうく
とくくめ給よくくはたうくやをいとのくよ
ろこひてのくまふあくよ浦うを海く人りを
なさよ福うひをとうるのふるるれうまくさとの
給ひてはそめるさそうけあはたさにまきり
はたうさよまうてことの給みくはたうを川
日蓋めるまいはつうさよれたくてんあよ海つ
をくくをんをうくまりるくくつまろやうおう
けてめくをあくくこよ人をのかせてはりあけさ
をくつをくくめのすかをを給へさせてさつか

よ拍子ものゝとまりよりゆ中納言あゝくはくまこと
なる地とゝゝらくゝれいりあかえんよと
て我乃ほりてはくゝんとの結ひてこよのりて
はゝれ上まくうゝひあゝよはゝくゝめお
とさけていくるめくゝ新よあもせくまときゝけ
てはくまのゝよまよひゝめ原拍子の新酒よ我
拍子ゝりゝり今ハおろゝしてよはきれもえゝら
との結ひてあゝまりてとくはろさんとてはか
をひさまゝしてつまゝゆ新刈まやゝ海乃うれ色
のよよ乃けさ海よおちゝ結ゝり人ゝあさまゝ
うりてよりくかゝくへまゝまりはゝ月ハもゝめまて

中結へ里人ゝ水をもくひ入まゝかゝうして
いさおの人ものよゝうなへ乃よゝりまとり是を
してさけおろゝまるかゝらゝして御こゝちを
いかゝあはさまゝ空とゝくゝていきれ下まて拍ハ
お光ゆまとあゝまんうとかきぬはまとこやを
貝をゝとゆさりまゝれもうきゝくお浦ゆるゆ
まゝ出そくゝしてあゝのゝいゝかんゝとはくゝを
ゝけて御まをひろけ結へゝよはもくゝめのま
里をまゝかゝくゝをとまさりのへ原なゝりゝそ
まゝ城乃結ひておゝう初るのまやとのゝまひ
けるまりそ思ふよ出うへまゝ事とはかゝなゝ空

云けるかひなきことあるべしとて人のひろるまに法ん寺
もとう記くうひつのあるさまに入らきあつ奇
なるあるを出勝さなるまよりうり中納言をいくいけ
さるるまさして屋むしこと我人りきりせしと志
行ひろれとさきをやまひていとよりくなり
給記よりうりひをえとらびまりはけるまわを
人乃きくまらりん事と日はうへくおりひあひ
きれたくまよやこをあるまりを人きくこつう
しく光しあるまりけるこを志とかくなひめ
やてこつひはあるこ
年成為て波立よりぬをこ乃江ん

まりのひなすとうくくさ波こと
とあるをよみくさう波いとうら記やはから
こうけて人よりこ成ませくくるこうこ
うらうこてりさあ
かひをくくありける翁をわひてて
こあるいのちをくひやきせめ
と書をつくさしへ給ひぬ光をやてかくあひん
かあんをとあ用ーうりきまりあんねうきて
き事ーとはり記ありとは云けるかかくやひめ
かくもり乃進よ波をめてくきさをんりやきこ
しめて内侍かうとこの方こよの給ありく

乃人の男をいろいろまなびてあハさ屋うく屋
ひめをいらはるゝ此女うとまるゝてゐんくまい
ぢとのあゝあきこゝ屋くまるれるゝけとりのも
ゝ畏てもやうじいまてあへり女ゝ内侍の給ひ
侍るゆかくやひめ乃ゝちいうゝおもとたゝり給
ゐんくまいるへきゝ一の給ゝせ侍るゐちん来り
侍るといへゝ侍ふかるゝ屋ゝ侍んといひてへ
ぬゝくやひめゝゝやり此御使ゝ申いめゝ給
ゐるといへゝゝくやひめゝゝあきるゝちゆゝあゝすい
くゝゐんゆゐきといへいうゝてものゝまゝり給
侍門乃御使をハいゝてゝを給ゝりせんといへ

くゝや翁ゝのおゝふ新やう侍門のめゝてのゝさ
まりんゐりこゝたおりんゝとゝひくゝ給ゝゝよ
ゐんゐへくゝをあゝゝひめ侍ゝ乃ゐゝまあきてゝを
いゝんゝゝゝけゝをゝゝゝなるゐゝうゝよいひ
をれゝいのまゝにもゝえせめゝをゝいゝのゝゝに
ゐり出ゝくゝにおゝくゝこのゝきゝなゝ紀ゝものゝいこゝく
侍ゝ者ゝゝてゝゝひめんゝすゝまゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゐんゝゝりてゝまゐゝきゝゝ給ゝゝとゝゝつゝ物ゝゝゐん
ゝまゝてゝいゝりてゝゐゐりゝゝゝゝ国ゝ主乃仰事を
ゝゝゝゝ世ゝゝ給ゝゝゝゝ人乃ゝゝゝゝまゝゝくゝゝりゐん
ゝゝいゝゝきぬゝとゝなゝゝ給ひゝゝとゝゝゝゝゝゝく

云けるを八是をきくてゆゝしくやひめゆゑなく
もあるべき国王乃仰をそむくべきはやまろ
ゐてらりと云ば内侍物ゐりまてゐ中をそうに
海門きこしめしておほくの人ゝをつかはしけるゝ
そりとの海ひろくやこまけまと申おりゝお
りゝ海ゝくこれ女乃ゝとりまやまろんとれ
ゐりて仰をゝ海ゝ物て仰るゝくゝ屋ひ光なき逢
ゝゝかゝゝちゝゝとゝきこしめしてゐつりひゝ元
ゝゝとかひるくゝんこゝ御よりかるこひゝく
ゝくやゝゝゝゝハをゝへこゝと仰らるゝおさを畏る
仰をるゝゝゝゝはめ乃ゝゝゝゝハゝくゝ文仕

仕りまゐ御ゝくゝもあゝゝ仰をゝてまゐゝひ
仰さりをゝて仰をゝ御せ給ゝんとゝそゝゝ光をゝ
て仰をゝをとりおゝさ所のお海ゝをゝてゝん物
をゝいりまゐ物さゝゝむゝ女ゝゝなりゝ海も
のをゝはおゝるゝよりゝ物りをゝをとりたゝ世さ
羅んれゝされまゐこひくゝゝよ物てくやひめよ
かゝゝゝ海ゝかくゝなんゝ海門乃仰をゝへ海ゝゝや
ゝ世仕りまゐ里ゝゝまゝぬとゝへゝくやひめこ
ゝへくゝ云をゝゝ仕やゝゝ乃ゝゝや海ゝへ仕りまゐ
仕ゝゝゝとゝゝゝゝゝを志井てつりまゐゝせゝま
りきゝえゝ物をんゝすゝ仕りさゝゝゝゝり仕て志

ぬをうり也おもふ船いとゝ姫ゐ拾ひ志ありひそかに
ゐまもをうみを見たまうそは何よりせんさはゐ
はをとり交はしゐ人を捨ハさうん死絶ゐ人さ
ゐうやゐうさといふなゑうことをりをはゐま
つゝ捨てもゐをやあると見たまへあまさの人
乃ゐんさをゐりゐしをむゐくをてゐ
しうあまさのふゐふ見ゐんゐをの海ゐんをゐ
よはゐん人きゝゐをゐさゝといへをあさなこゐへ
てゑ天下の事ゐをゐと有ゐをゐりとも出命の
あやうきこそおゐかゐまゐゐをゐりゐれハ拾つゐ
うまゝゐまゐきゐをゐをゐりてゐさんとゐく

しまりてゐやう仰のゐ見りこさに仰をゐりハ
をまいゝせんとゝてつゐうまゐ迷ハ交はゐへゐり
ゐりゝそおゐりぬゐ海ゐとゐうやつこ見ゐまを
うまゐゐゐゐゐまゐてもあゐむゐ山をて見付
をゐる仰ゐれいんゐを世乃人ゐ仰を仰ゐゐと
うゐ世仰をは門仰世ゐゐ、ゐゐやはこまゐゐ
ゐハ山りゐらゐゐを世はりゐゐゆ有志ゐ海ゐん
仰ゐをて見をんやとのゐまをはゐゐやはこまゐゐ
ゐ仰ゐいと絶ゐゐ也仰ゐんをゐくて仰ゐんゐゐ
とみ絶きゐして仰ゐ絶んをゐれをんとをうをれハ
仰門仰ゐゐ日を完てはゐゐを出のゐてかゐや姫の

家よ入行かさく乃給よ光みちてけらるてゐる
家人ゐ光ゐんとおゐりてまけく八神とこう
ゐの人ゐをりてをゐ人とそんーめるく佐
らんーけまはるくひちくめてそく光くしさせ
まひくゆるさーとけそゐくおりーまさんと
さるるよかく変ひめおゐ人くそうをもの多ハ
世國よ生て佐ゐハこうけうひ治もめいとゐて
れりーまー雅くや佐ゐんとうをけ門をこの
けあゐむをゐそおりーまさんとて佐こーを
ませゐよばくやひめこさとけよ成ぬもり
なくくちおりとおりてけまゐ人ゐはあう

さりうるまとおゐーて佐ゐもをゐはゐていー
うをもを社佐かゐちとおまゐひうまをゐて
ふゐりなんと佐ゐ佐まハかくやひめをもの
かゐちよ嫁ぬ佐門行めてくおりめ佐ゐて
幸せ社とめかゐーかくゐ社佐ゐ交ゐこ九佐
まゐこひゐかさて仕まゐゐ百くゐん人くゐゐ
ーいゐめーうゐうまゐ佐ゐかとゐるやひめ
をゐ行ゐくゐゐ佐給ゐんゐるゐをゐおゐくおゐ
ーけまを社ーねをゐくゐ行ゐくゐ心ちーてゐんゐ
行せゐひゐ佐佐ゐ佐ゐーよなて換ようくや嫁ま
ゐゐ佐乃ゐ行をゐ佐ゐ給うくおをゐて

うむさそとゝ海るかくやひ夫ゝ毒へ
ぬ史事

むくらゝ人下ゝ下を年ハ逢ぬる身の
なとうはおれうてなをもゞんん
あれを山門山らんしていかゝ海り行りんそう
まるく船ゝさ海山心さよゝち海多へくもお
ほさまさりけまとはりとて東とゆ一の人へき
まあゝひもうゝせ給ひぬ山ゝよ山ゝまつう
人とんのよゆかくやひあ乃かゝりゝよるへ
くふあゝさりけるまゝと人ゝりハけゝらるり
とおりけゝ人のうれよおり合すれを人よも

あゝすかくや姫のゝ山ゝよかゝりてゝひとり
色ゝのよゝりくく山かゝくゝまを海り給りを
うくや新発乃山ゝとゝそ山文をうゝてかゝも
させ給よ山かゝり山ゝりをにくゝ人きゝしかゝ
もゝのひて面白くゝ東ゝよ付ても山ゝをゝを
て山ゝらんうやうゝよて山んゝとゝ新りなく
さ発ゝのよ程よゝ二年をゝりゝて芸の初ゝりかく
や姫月乃れもゝろゝ出ゝ海をんをくつゝよりも
面白ひゝ海姫ゝ海人乃月の海んゝ海きいむるを
せゝゝけまゝたゝりゝと毒は人ゝ小を月とんゝて
いみゝくゝ海ゝ七月十五日の月よ出ゝて

せちよ拍思へはなくしきあちらくにたりそ海人
人行れのおされよはけさくやひめまいも
月とあられうり給へたはたとなりてはそうす
まを給くさめまいくしくれはしきく事も
為しよくしくんなくせ給へとりつ我きてか
くやひめよ云拍おんてう心ちをれもかくもの
と思ひしより拍よそ月をんのへそうきまに
と云かを為ひめをんまはせそん心はそく表り
給りおてう拍をうをけさ給へくさと云かく為
記あ乃ま事よりしりてんまは拍思へかうう
きなり是をんくまを佛何の思ひのへそおはを

殺人事何くとそといへた思ふ事もあり拍
をんんかそくおはゆるといあまあきれ月かん
給ふそ是をんあへまて拍おかをきいあそと
いへていうそ月をそてあきあんとて拍月おれ
を出若ほくあけき思へ夕やそは拍思いぬ
ケ記地月の程よ必ぬまはは拍くあ所ケ
きを記なとん是をほたふものとも我拍おかを
事ふへとさ為事と親をもめくなのふも
ふとん八月十又日いりの月よ出若てうくや
記殺人いとふくを記ぬ人見を今はけくこを給
いをなきの人是をんく親をを何ふそとひさ

ちくかるを屋敷をのくく云ひこをしらんと思ひ
ちらしをうるくくにんまとうく給りんをのそと
思ひて今を迄一ぱいはりたる迄のこやはとてお
おはりぬ歌そをのう為きは國乃人をとあくん
ぢきの歌人也さうをあんむくしらちきりる
けるよりあんは世界よはまうてきちりける
今をかくるへ歌よ歌にそれとは月乃十又日は
はをとは國よりむくよ人くまてこんをとさう
ひたあくけをもはりなけうんのかるくきる
をひ長よりは思ひをけき給るをりとゆひくいを
くなくをおきれこはをてう事をのの人

そ行の中よりんつけきこえちくくとなる
の大こちをおをせくをわうきけちなくよま
てあくるひなりくわうる歌伝人うむう人中
えんまきにゆるさんやとをく我こそちかめと
てる記のくあるひとへかるけ迄りくあひめ
云月は歌乃人をそ又母をかく対をるとてう
のはよりまうてあくかをこは國よりをあま
をの年をへあるをんるけるはは乃又母法
年も芝こたちくはかるを久変あそひきちく
てなくひなまりいんくかんん地もせをうれ
くのをあるされとをのうんをこたをわるんと

よろとはゑくわうともよいこゝろざしふかくはかりし
もろ人も年はなくひろく立まうれなん事をん
ちくなとあてやうたゝくてうりはらふことゝこ
なりひろこひかしんろのふへくさくゆ水のま
ま人同し心よすけりしかりけ字こみの事を清
門きこしめして竹取ちぢにはかりはさせ給へ
作法に竹取出あひてなく事限なしはるゝとき
けくよ清けを志ろくあしもかくまわり目をたく
またよそりおさされと年八文十とろりなるよけまし
いとも物思ひにはかりそれになん君にまゐりにて
みまとみや御つゝひお返せさすとてあさ丹にいふ

侍とのへうしく物思ふ姫を迷はるゝと侍ふまじ
竹取なくく申しはせ十五日にはあん月乃都より
かぐや姫はむかへにまうでくれるなりとくいふ
せ給ふは十五日に人々給はりまうく月の都の人
まうできたらばとらへさせんと申すは使ほりまゐらず
捕されん乃為に振りて使そうし侍れば中よ安文
みてのちに一日見給ひし御心にわすれ給
きぬよ明き見ぬかれこうがく姫を留りてい
かく思ふへきかの十五日はつきくよおほせて
ちよくしかねの大将のおほくよと云人をまして
六衛のはりさ合わく二千人の人を竹取が家よ

ぢうこと[illegible]あるよ[illegible]て[illegible]ぢの[illegible]の上よる人[illegible]の上よ
千人あまの人こおほうらけるよ合てあけうひま
もなくまもなくまもなくまま[illegible]人こもう矢をうい
てたもやの内よは女とをとこんよおりてちらん
女めりこめの内よかく[illegible]ぢ[illegible]というとうくおると
おきれもめりこめの戸さてこちりおり
おきるの云のちうりちる[illegible]天の人よりまけ
むやといひくあのうえ人よおる人こよいとく[illegible]も
おうらようけらはやというり紡へまもう人
人乃云かはうりてまま内おりうちう一さ
よあうはまついち海てかりけうさんと

おもひ侍りとゝ、おきかこれをきてきのり
うまおり見をきてかくあひ侍ハけうあて
海もりたかゝ見をきちくこをちうりたあり函
の人をぬくくらぬうりう矢していうまて
うくけしこめてまたは國乃人こハみかあうか
むとけおきくかりんとうすたは函乃人きなと
けきんけうう人もうもあうおきけの云拙
海むうあまよこん人をはもちさつめてまれこと
けうんけうきんけうりこをうりてうれくりお
ときんけうちりをうさいてくあ海のおかやけ
人よんせくとちをんせんとちくこちおるかく

屋敷いとくこはるうよかのるまひそ屋のよ
おなじ人皮乃きくるいとまきおひ一つまとうろう
んさーとう成思ひをたてをるんを海書乃
口おーう作りけるとなるこたちきりのるりけまた
程なくあぬへさなめりと思ひ乃ひく作る逆
親まのかるり足をいさかふたるまるて
まるん道もやすくとるまきに日はも野おう
ておとーけのいと海とゆまつゆる
さまぬよりてなんかを思ひなけき作るたん
をのこ海とうーくさりるんるけ乃くる屋
かくく作るみ初の人ハとけうらよおひを色

もとおん四十三年をなく作るりたるおへまう
舞んするをいみーを作るたあとろへあへ海
さ海をとんをるさむるすこひーかるもといひて
おまるむものいさまるをそう海ーきを
かるさ海彼ゆをたりるとねるこおりかる
程よりひ手をてねのて計よ部乃おりひろ
のあるたよををさて初りるをもち月のあう
さ段十あいせよる計ますてるを人の毛のあかさへ
月ゆる程るり大をるるん部乃をておりさ
てたるりス尺りりあるりるる程よるちるる
さり海かるふくるんとを物よおそを新くう

まておくるかたん心もなりけるをかくうして
思ひおこしてゝ弓矢をこわくそんとをれたる
力もれくなりくなりくかへりくる事よいはうし
まものねんていんとをれたほうさ海へいさ
けきたあをもたくさそて小船くをまをもれく
ままりあるうたてを人たハはうそくのきよら
なるゝ物よも似をとうて車一くくりらいさ
しりこを事よりを上とれかりき人交はこまろ
あるまゝてこといひよりけく思ひつるこやつこ
まろと物よりをひしりをうちてうつくしよぬ
をりいたく汝おきこをれ人いはうの後くくと

おこをかはくりけるよりをまて海ゝ事ますけまとて
かくゝ時乃程とてくゝ殺そこらの年はそこ
程のこうものひくゝ身を以つる海のあくくなり
よくりかくやひめのきをはくりあ人をとくれ
もかるを以ゝ事きをのまちをれよをきりおり
はくるなりつゝ乃うきりてぬまをかくむ人
かおをれいなれるけくあるいぬ事也をや也
しなれとをいれきかをくへくゝかくやひあ
を所なひくてまつるゝ赤金年よ殺ぬう
ゝ所とのあんよあやゝ見殺りぬ又とあよ
かくや姫とゝ人をおくゝまくゝむと云をに

おもてをかくるひあぶぎ病とまぎらはせんえ
出おりまんまんとやせたるすいなるく
屋のよとう人車をよせていさかくやひめうま
る況有よいてうく人数れしせんといひてこあ
しりる況乃戸外しくあれよあるぬかしーさも
人をかくしてあるぬ女いうてあるなかくや
姫とよ出ぬえとくむまりられしくさあ人
きてうきあり竹とり物と記くるさ記せる有
よりてかくや姫いふあく母を心よもおして
うく海う新よの国くむをふよりとり行人と
いひとも何にこの礼しふよりんをくるもなん我

をいうたせてきてくあるのかりあるてくて
ねてれしせひとるれをくこ記まは心ままひぬ
文を書置てまう新んこひーかしん形くうる者
て乃新へとくおるきて出あとはいは国よりまま
めるとおるうもるけ記せなるぬかとまて後て
るわり神めるる者ーぬとくかるくこて光花道
ぬ況をく家をかしんと思ん人月此出さん和
き乃んをこ世ん人乃新へ乃新きりてまう海さうりを
落ぬへさんちまを海と書をく天人の中ようせ
ふるしこうあまは羽衣いまりはあるは不死の
くすりへをひとりのこ人云つかるはくこわ

なれきこゆるをこそ此はしたてまつりたまへれ
あしかりなんはしたてまつりたまへれとこそ
なをなほ行ひそかにかんとてぬきまこころゆかに
まんとをもへれいあの国天人はしたてまつりたまへ
ゆしてきせんとなんそのあはよかくなひめたる
ましてといひきあはせたるへきをもはしたてまつる
といふらの一こといひまへきあるへきことなりと云
てよくく天人をそしりとのたまふなりあひかく
やはしたてまつりぬるなのくまひそとていみしくも
ひとよりあはけよ沛文なりけるあてぬさまに
なりかはきこのまこの人をあひくらんさをあへと

ゆかさまはしたてまつりてとりいくこあめまこと
にれしくこうれしき事一交仕うまつりらに
なりあるもかりをとくこうしきあはまて仕まつて
心はをれほしめきまはしめとをんつよく思
ほをとりあはしまあけなるものに思ひとく
めしまめるまんのうやまはりはりぬとく
今はとてあまの羽ごろもきうりて
君をしろりと
やそつかれくすりそへく既中はをまひまをして
きこえ中將よ天人とりて仕まつふ中はをとり
仕まつあまはれ明ごろをおきをれりつまは

おきるなのとはいへとも
うせぬはこそぬこそ
くれて車よりのりて百人とうり天人くてて上
里ぬをはおきれ女ちはなみこと共てまと
色とうひのあれ書ときこえとまんくきうせ
けまと何せんりう命もあかんたうあよう
何事もうをあとてくすりをくちをやの
ておきをあうてやこ者せう中ねんくひき
くこて塩まいりくかるや婚をあるかひと
とめ決然ぬ乳をこまくとそうすくすりの花
用よう　こうくくあるすひろげて出流しく

いとと　　ふうくせ紙ひて物をきこしめさを
ほあそひをとをなうわそりぶいぢん上達報を
めくくいつきの山う天りちうれとくたせのよ
よあ乳くそうをするう乃國よあるるふるん
ひ報をちうく天も北うく伯るとうをこれを
きう陽うまひうく
あふことをなみをようを我身よ
志ぬくをりも何りうはせん
加れ身為不死のくすりよ文ちかくてはは
給ひとちうくくまは月乃いもうきとい人
とをてを為う北國よあ形るふのいうを形よて

所く百記ほ所のまさ
さを行人作文事乃くすりのはかるへて史
をつけてうやまうへきよし伝のふそのよしを
無者をあまさくして山へのわりけるもりなん
そう山を物乃山とは名付けるは其そうりま
こそ其中へさまらのかるとそいひつへきなり

寛文三稔癸卯仲秋吉辰

長尾平兵衛開板